

地域包括ケアネットワーク No.76

真庭地区での地域包括ケアシステムの構築の取り組み

真庭市医師会理事 竹内 義明

それぞれの地区において地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいるとは思いますが、なかなか思いの通りには進んでいないのではないのでしょうか？

真庭においては、地域包括ケア会議の先代である作本先生の13年にわたるご尽力にて取り組みがかなり進んだ地域として評価されています。

これまでに、認知症対策、認知症セミナー、多職種連携の取り組み、移動支援（ストレッチャー移送の取り組み）、介護の魅力を伝える会などのさまざまな取り組みが行われてきました。

認知症対策では、認知症キャラバンメイト数403人（岡山県2,868人）、認知症サポーター数11,139人（真庭人口の24.7%）になっており、平成19年から毎年認知症セミナーを開催しています。また傾聴ボランティア登録者が59人います。

多職種連携の推進として、平成20年から多職種懇談会を開いており、いろいろなテーマについて話し合いをしています。現在は毎回100人を超える参加になっています。

ストレッチャー移送の取り組みを平成28年より開始しています。利用実績も徐々に増加しています。

介護の魅力を伝える会においては、利用者とともに笑顔で元気な介護職員の写真をスーパーのホールや各医療、介護施設にて展示しています。

一昨年より、私が引き継いで真庭市地域包括ケア会議の会長を務めさせていただいています。

先代よりの今までの取り組みは継承しながら、次の3点を重要目標に取り組んでいます。

1. 集いの場を増やす。
2. 移動支援の仕組みを増やす。
3. 地域包括ケアシステムの啓発を行う。です。

集いの場は、現在、支えあいデイサービスが5カ所、げんき輝き教室が35カ所、認知症カフェ・ふれあいカフェが6カ所で開催されています。

これらの集いの場に來られる利用者の送迎の要望がたくさん上がってきています。

地域包括ケアシステムの啓発活動として、平成29年より年1回、地域包括ケア会議研修会を開催しています。

生活支援コーディネーター、介護予防コーディネーター、介護予防サポーターをはじめ多くの方の協力を得られてはいますが、住民への周知はまだまだ十分な進捗状態とはいえない状態です。

まだまだ住民への十分な啓蒙が行われてはいません。

介護の現場では、介護職員の不足、とりわけヘルパーの不足が深刻であり、お助け訪問の実施が困難な状況になってきています。

保険財源が枯渇してきているため共助による支援が圧縮されていくなか互助によってお互いを支えていく社会の実現が望まれています。なんのインセンティブのないことに対してモチベーションを上げていくことは困難です。

20年度において、介護予防交付金が倍増され、自治体の競争を促す仕組みが取り入れられます。これが呼び水になって地域での機運が高まってくれることを期待しています。いまのところ自分ができることとして、日々、成功している各地の取り組みの情報を入手して真庭においても実施できないものかと思案しています。